てんびん

ざ

西出楓楽 Nishide Fuuraku



に励む同居の義母(西出一栄)から影響を受け続けた。さすれば半世紀に近い川柳人生、手にし たこの句集の重量もむべなるかな。 年輪に刻まれた句集、二十七年にわたった結実の重たさである。加えて先立つ二十年は、作句

て金糸になる、そんな予感が既に〈風の私語〉にある。 衒いもない、技巧もない、地に足をつけた出発だった。日常生活から紡ぎ出される糸が、やが

五割引のビラへ素通りできますか めし茶碗をいつも味方につけておく

濡れた手で句想メモする台所

たまさかの暇は借りもの着る如し

お茶の間の隅にわたしの解放区

ない。濡れた手で句想をメモする楓楽さんの台所は戦場であった。茶の間の隅をわずかな解放区 NHKの朝ドラ「芋たこなんきん」の町子(田辺聖子)も台所で執筆していた。乾いた手では

楓楽さんの川柳との戦いが始まったのである。

紅葉を師と仰ぎ、終生礼節を失わなかった。楓楽さんもまた師橘高薫風の翼下にあって、自身の

何にせよ、誰にせよ、恃むべき師を持った人の幸せであろう。泉鏡花はわずか七歳年長の尾崎

羽をはばたかせるのである。

太陽をいつも原風景に置く

絆などペーパーナイフでも切れる

本いっぱい積んで私の砦とす

幸せと同じ重さの足枷よ

ふところに持っているのはモデルガン

嘘すこし書くと本当らしくなる

幸福の絵は淡彩で描いておく

自転車で回れるだけのテリトリー

既に身辺詠から脱し人の世を照準に、対象のテリトリーを太陽にまで広げた。句の水準もいっ

三句目や終わりの句に窺う。楓楽さんは師薫風を見上げながら近づき、成長して〈幸福の絵〉の ぱい積んだ本の高さに引き上げられている。人の世を詠嘆しつつ肯定した橘高薫風の作風を右の

色を淡彩と心得たのである。このひとらしい色合いだ。 歳を言う自分をガードするために

おなごはんと呼びたい女減ってきた敵はまだすらすら針に糸通す

持つつ情が、特替についてあれる

に、人間としての熟成と句のいっそうの熟達に向かわせる。 作句人生の順調が続く。情緒にうとくなってはいない。〈晴のち晴〉の快晴が、おんなを根底 晴のち晴少し情緒にうとくなる

ばならぬ自身をもわきまえているのであろう。 なお仲間を求めて、ますますやわらかさを失う人の世に揺れる。揺れながら男を見極め、元気な 、敵、に抗い、壊れやすい自分をガードする。守りながら、しかし川柳なるもののために壊さね 川柳は人柄の反映である。楓楽さんのもの言いやお人柄は、はんなりとしてひら仮名な、そん

夫病む絆の撚りをきつくする

闘病は長く短い二年半

母であり妻でない身の置きどころ

原稿用紙のマス目マス目にある地獄

身のうちに雪降り止まぬ場所がある黒髪がいのちであったよき時代

辛い二年半だった。長いというか、いや、やはり短かったはずだ。生涯を共にした伴侶に献身

して楓楽さんは優しく夫君は幸せだった。『天秤座』に詠まれた哀傷である。

は地獄の責め苦に思えた。一字一字にいのちを削る。ひとり楓楽さんだけではない。文学に生き んとする人の創造は呻吟である。のた打ち回る苦痛である。詩人・山之口獏は一片の詩のために 楓楽さんは『川柳塔』の既に重鎮である。相ふさわしい句を詠まねばならぬ。それ

百枚の下書きを捨てねばならなかった。

ば、雪降り止まぬ身の内を明かそうとしない抑制の働きであろう。句の熟達とは、自身のありの ままをうたえ、言いたいことを余情まじりに言い尽くしてなお句柄を低めないことにあろう。 れば惑溺もない。自負もなければ奢りもない。楚々として潔癖な句風に物足りなさがあるとすれ 楓楽さんのやはり淡彩な句業である。ストイックに身を持して崩れようとしない。 許し合うべしと花屋に花がある 挑発もなけ

夢掴むために両手は空けておく長城をいつか月から見てやろう

魯山人の皿おおらかにいのち盛る

風船

一つ飛ばすわたしのエピローグ

渺 み方を示して才能の真価を披瀝する。紡ぐ糸が金糸になった。 川柳は発見である。そうだったのか、花屋の花は。楓楽さんの川柳ワールドが広がった。視野 月からの視野と目の前の皿。作句の題材は遠から近、大から小、その逆も可能な自在の読

魯山人の皿に見まがう『天秤座』におおらかに盛られた句業の所産、その収穫の豊饒である。

早くに天稟を見てとった薫風さんの炯眼であった。

師の許へ旅立ついつかが楓楽さんにもこよう。『川柳塔』人ははるかに遠い日、天空に放つ風

船一つを深く銘ずべし。その日がどうか青空でありますように。

またの日の第二、第三句集にも女人薫風として輝かんことを。 楓楽さんの遅過ぎた第一句集である。願わくは、『天秤座』にもられたおおらかないのちが、

平成十九年 (二〇〇七) 三月

和歌山大学客員教授 木津川

計

あ 魯 針 晴 幸 風 序 目 のない時計 Ш 2 0 福 0 人の が ち 0 私 次 175 文  $\blacksquare$ 話 晴 絵 (平成7年~平成12年) ......109 (平成2年~平成6年) ......75 (昭和5年~昭和5年) ......9 (昭和60年~平成元年) \*\*\*\*\*\*\*39 木津川 装 計 丁 3 安 積 義 之

風

0

私

語 (昭和五十四年~昭和五十九年)

主婦の日々月月火水木金金

クリームシチューとろり妻の座たしかなり

京うまれのなにわ女で現実派

円満にきました主権在妻で

字余りと字足らずウマの合う夫婦

バーゲンを回れば終る妻の乱

梅漬けて無事に今年を折り返す

休日の夫のゴロ寝とがめまい

妻ですもの裏金と使途不明金

息子とは心の奥で語り合う

白を白く干してたしかな妻の位置

キッチンを磨くこころが揺れる日は

妻として時には受ける変化球

感情の襞から我慢こぼれ出る

コート脱ぐ春の息吹を受けたくて

帯少し派手にし姑の形見着る

濡れた手で句想メモする台所

欲得を追えば行きつく枯野原

中年の楽譜に休符みあたらぬ

姑が今居たらと梅の塩加減

ドラマなど持たぬ夫婦にある歴史

さらさらとペンが走っていい便り

たまさかの暇は借りもの着る如し

忙中閑まず何はおき昼寝する

青空と暇折り合わず花終る

四面楚歌身に合う容器欲しくなる

まっすぐに生きて胸張る空がある

いら立てば塩も砂糖も効かし過ぎ

快晴へ損してならじふとん干す

口きかぬ不便さ夫折れてくる

小春日へ小さな嘘は聞きすごす

作業着の似合う夫で従いてゆく

初夏の風ファイトファイトと吹いてくる

世代の差埋める言葉が見当らぬ

人情も異常乾燥注意報

姿見がだんだん憎くなってくる

花ばさみ非情になってゆくわたし

生きるとは恥を積むことかも知れず

快晴もほめてもらっている幹事

感嘆詞ばかり中味のない会話

意地のあるロボットでよく故障する

春や春へそくりまでが浮かれ出る

かばわれて心の箍が締まらない

赤い風船突けば童話が飛び出そう

愛のある暮しで花を絶やさない

なぐさめを自分に言って敗けている

コーヒーで裃を取る女連れ

青春の余燼の中の桜桃忌

現代の落人かくれ里がない

去りぎわにだけ喝采があればよい

金太郎あめの素直が重くなる

女偏つけると迷路深くなる

過去形で語ればすべてあたたかし

遮断機を上げたが誰も通らない

父と子が入ると風呂が長くなる

めし茶碗をいつも味方につけておく

地図にない街で捨てたいものがある

自問自答やさしい答出している

躁の日に描いてしまった蛇の足

味噌汁の実を大切に思ってる

俗人に果てなく続く数え唄

雨降ってわたしの午後にしてくれる

熟年の坂はしがらみ引きずって

お茶の間の隅にわたしの解放区

たのしみをいっぱい秘めた三分咲き

五割引のビラへ素通り出来ますか

かなしばり劇中劇が終らない

誠実で真面目で救いようがない

仏飯がこんもり盛れて安らぎぬ

気楽さの心の中を風が吹く

春の用意は少し早目にしておこう

距離感をとても大事にして夫婦

母の影何度も踏んで西へ行く

まちがったドアをときおり叩いてる

子を入れる円をいつでも描いておく

雲はゆく男の中の幼児性

子の毬が弾み視野から消えてゆく

水を得た魚は恩を忘れがち

花時計天を指したい時もある

敗北の心の中を野火走る

石になるくらいの芸はもっている

想像力が豊かで困る時もある

小糠雨心の襞に降ってくる

遠花火 太宰治も青春も

風鈴が訳してくれる風の私語

友達がきっと待ってる無人駅

幸

福

0

絵

(昭和六十年~平成元年)

新緑へ夢が勝手に走り出す

反論をする時外す老眼鏡

むかし女は屋根の重さに泣かされた

愛とエゴ糸がもつれて解けません

まっ白な画布をはたちの子に贈る

発芽せぬ種も大事にとってある

似すぎてる親を憎んだことがある

さかむけの指の先から昏れてゆく

米櫃の中へ翼をしまい込む

てのひらの中でむかしを眠らせる

切り札がないのでしゃべり過ぎている

手頃な皿があるので愛を盛りつける

千羽目の鶴が久しく折れぬまま

尻尾隠す悲劇喜劇が終るまで

死生観時計は五分進めとく

両の手をあふれたものは地に還す

期待せぬ人からもらうにぎりめし

幸せが続きフルスイングを忘れ

太陽をいつも原風景に置く

小説の中へときおりまぎれ込む

選びたいものに柩の入り方

胸底をふる里行きの汽車が出る

十二月もうアドリブは通じない

まな板の上で言い訳せぬように

小心な亀で大きな甲羅持つ

現し世や鬼より怖い仏たち

絆などペーパーナイフでも切れる

食卓のレモンは朝を裏切らぬ

失ったものなど想う風の夜

六方は踏めぬ自作自演劇

炎天のどこかでベートーヴェンの曲

潮騒もこだまも好きな夏帽子

幸せと同じ重さの足枷よ

体力で脳の隙間を埋めておく

枠の中で自分の尻尾ばかり踏む

幸せが続き間延びをしたリズム

胃と口があれば女は生きられる

親切な人がだんだん重くなる

負け犬の眉間を出られない思案

蛸に墨おんなに涙あるごとく

本いっぱい積んで私の砦とす

愛不在おでんに味がしみてこず

ふところに持っているのはモデルガン

女冥利の一つ季節の服を着る

しんどい日しんどい音で鳴る時計

懐疑心素直に傘がひらかない

しみそばかす心の灰汁が出てきたか

目のうろこ取れたら諸行みな無常

争わぬ人にいつでも負けている

帳尻を合わすお茶漬食べている

待つことに慣れて上手に豆を煮る

忠実な影だけ連れて夏ごもり

雑念がいっぱい爪がよくのびる

大空は人を等身大にする

杓子定規の位置をずらしたとてひとり

こだわれば豆腐にだって芯がある

安っぽいヒューマニズムで靴が減る

腰痛ははすに構えたせいらしい

広大無辺の机持ってる少年期

引出しをあけると黴のはえた夢

幸せを待つ鏡台をひからせる

サシスセソだけの女で朽ちそうな

スランプへ羽毛布団が軽すぎる

土踏まずに土を踏ませて安らぎぬ

思い出を抱いて脱皮がまだできぬ

椅子深くかけて互角にわたり合う

宝刀を抜いたが空を切るばかり

波の来ぬ位置で退屈しています

膝をかかえてわびしさを倍にする

胴長短足きっといい人なのだろう

信じよう電話におじぎする人を

あやとりの紐をなくしてから独り

どう見ても妻がやり手のたこやき屋

嘘すこし書くと本当らしくなる

倖せを競ってトマト赤くなる

善人の群れにいるのも楽じゃない

自転車で回れるだけのテリトリー

お世辞きく方が陥る自己嫌悪

あいまいな笑みを浮世の風除けに

ざるで水何度掬えば許される

にんげんくさい鬼で人間許せない

てにをはをたがえ本音が出てしまう

姑になる古い眼鏡はかけ替えて

着飾った女が風を持ってくる

化粧瓶いっぱい並べ暮れなずむ

小心でいつも太目の線を引く

げんこつの中で明日を眠らせる

過去帳を疲れた鬼が繰っている

持って行きようで四角を三角に

絵具みな溶いておとことおんな の絵 同い年つい採点が甘くなる

女文字きれいなだけが能でない

春の海文学的に暮れてゆく

乾いた街に自動扉が多すぎる

等身大の自分に出会う風の街

弥陀の手をちょっと出たくて旅をする

子の歳をたまに忘れることにする

ときどきはスープ押売りして同居

母もまたその老母に似て苦労性

ふるさとのお宮でもらう免罪符

頭の中でときどき起こる土砂崩れ

僅かずつ悔いがたまってゆく眉間

幸福の絵は淡彩で描いておく

睛のち睛(平成二年~平成六年)

まだ少し残る若さで罪を積む

歳を言う自分をガードするために

底冷えについ打ちすぎる句読点

春愁へ言わずもがなが多くなる

夫婦という縁で喜劇を演じ合う

池の深さを知っているのは老いた母

引くとあるドアならちょっと押してみる

三男は指定席には座らない

女の声が近頃大きすぎないか

一、こうらぶっなったので甲してみ

爪丸く切り初孫に会いに行く

花もらいボキャブラリーを試される

情けある言葉が甘いはずがない

大事件孫が笑ったくしゃみした

句読点ない日が続く孫がいて

孫できて地球大事にしています

老母といてやさしい息になってくる

ダメなものダメと孫には言いにくし

小春日へババ馬鹿ぶりを隠すまい

芸に秀で老斑美しい

ちから水たっぷりくれる家族たち

愛は無機質ゆるりととける角砂糖

喜びを倍にしたくて花を買う

長電話するとつきもの落ちていた

頭痛薬古いおんなの座右に置く

忙中閑本屋のはしごでもするか

風光るわが終の日もこのように

弓に矢をつがえたままで黄昏れる

万華鏡くるくる主張など持たぬ

金の要る儲け話を斜にきく

心あたりあってくしゃみが二つ出る

楽観論太目の縄を綯いながら

平和とや甘い果物ばかり増え

孫抱いて今は夢にもノラを見ず

屋久杉の机真実しか書けぬ

椿落つふいにいのちが重くなる

さよならを上手に言えたことがない

闘魂をくれた他人のにぎりめし

ある予感身に合う穴を掘っておく

狂わない時計を持って疲れ気味

大根煮るこの安らぎは何だろう

糠床の底は女の痛み知る

つじつまが合って疑い深くなる

リハーサル続く仏に出会うまで

春先の雨とやさしさごっこする

春を待つジョーク多目に用意して

母のいる場所が地球の中心だ

米を研ぐたしかな位置を守るため

まもなく散る花よ饒舌すぎないか

外堀も内堀もない母の城

花屋の花がみんな味方のはずがない

バラ咲いて夢の続きが見たくなる

男にも駆け込み寺がいる文化

泣き虫で上手に火の輪くぐりする

えんどうを剥く楽しさを知っている

93

旧仮名で書くとにじんでくる和み

嘘少し愛をきしませないように

美し

い日本語に会う城下町

湯 の街で男を軽く見てしまう 善人がひとりいるので輪が出来ぬ

着飾って言いたいことはこの次に

柿熟れて往生際を考える

掘り下げて出られぬ穴にしてしまう

敵はまだすらすら針に糸通す

たこ焼が好き人情家かも知れぬ

父よりも母は立派な丸を描く

ピカソの絵見てから言葉から回り

脇役の群れで光っておればよい

旅三日見えないものが見えてくる

不覚にも道でおぼれたことがある

一枚の舌でぎくしゃく生きている

だまし舟海の広さをまだ知らぬ

嬉しさを閉じ込めたくて返し縫い

しわくちゃの大風呂敷をひろげたり

八十路なお母はひとりの灯をともす

人妻として心得る川の幅

似てはならないものに似てくる影法師

平熱が少し低目で淋しがり

男と女のコントは斜めから見よう

一流の下っ端になることにしよう

ピアニッシモにはじまる春のものがたり

幸せでないものねだりばかりする

酸欠の街で四角になる思想

流れついたところで歎異抄ひらく

自分の足ひっぱりながら生きている

名曲を聴いているけど歯科の椅子

鬱憤をノートの中で眠らせる

寂しくてタネとしかけをすぐ明かす

太陽と未来月とは過去語る

竹光で斬られた傷がまた痛む

おなごはんと呼びたい女減ってきた

女坂うぬぼれ鏡拭きながら

へそくりを貯める女を上げたくて

愛を入れる壷は素焼きのままがよい

晴のち晴少し情緒にうとくなる

鳥獣戯画の中にいっぱいある答

目尻からおんなの秋は深くなる

針のない時計(平成七年~平成十二年)

昼の月言いたいことがきっとある

志ん生のおなじところでまた笑う

ときにわが甲羅のサイズ間違える

褒めるのも褒められるのもくたびれる

ワンテンポ遅れて笑う下心

良妻と賢母で意見噛み合わぬ

郷愁は母のおこげにたどり着く

小器用な指不器用に生きている

義理と見栄つっかい棒にして生きる

初夏の風笑い上手を選って吹く

少し汚れた白がだんだん好きになる

失敗談大げさにして媚びている

魂を売ります安うしときます

山越えるたびに立派になる尻尾

昼寝から覚めるとあの世かも知れぬ

さっそうと歩けば風が従いてくる

かさぶたを無理にはがしてから孤独

笑えないマンガばかりがてのひらに

秋なすびとかく女は御し難し

難しい言葉で愛は語れない

前向きになると腹立つことばかり

湧き水がうまい地球を信じよう

魅力ある男背中で物を言う

おにぎりは独りで食べるものでなし

日暮れ坂等身大の影連れて

床の花枯らし敗北感しきり

犬養節聴きぜいたくな居眠りよ

身のうちに雪降り止まぬ場所がある

やがて夏遊び仲間は発酵す

夫再手術悪魔に魅入られて

病室の夜にまといつく負の思考

夫病む絆の撚りをきつくする

闘病は長く短い二年半

夫逝くどこかで癌の嘲う声

病室へ夏合冬のパジャマ買う

大いなる遺産子がいる孫がいる

義父母父夫送った黒真珠

惜しまれて逝き賑やかに送られる

母であり妻でない身の置きどころ

初盆へ五キロ肥えたを申し上げ

向き合えば遺影表情和らげる

よく笑う人の隣の席をとる

悔しさに気づくなぐさめられてから

気がつけば世に未亡人多いこと

象の鼻キリンの首も生き上手

ひとさし指を自分に向けて心病む

今だけしか言えぬ言葉が出てこない

五月晴れ仁王にジョーク通じそう

踊ってるお方へ笛を吹いて上げ

どの音もみな胃に響く十二月

雑音の中のひとつは天の声

吃水線あたりにおいてある白紙

反省が過ぎててにをは狂い出す

物差しを替えるこころが疲れたら

野心家が揃い喜劇の幕があく

温泉で忘れ上手になっている

風に逢い火に逢いひとり旅続く

たてまえを崩すと脇が甘くなる

相槌が適切すぎる敵だろう

問題は中味おとこもたいやきも

古傷は何度なめてもほろ苦し

ケイタイを切ると存在感消える

雲百態どれにこころを預けよう

思い切り笑う泣きたくなった時

大師みち辿るとうまい水にあう

寒い日が続いて神に試される

正直な舌にときどき手を噛まれ

ポリシーがないので誰とでも笑う

楷書の父草書の母を見て育つ

春愁へわさびちっとも効いてこず

シクラメンに譲るわが家の一等地

残り火をあおる扇子は大き目に

背もたれのない椅子性に合っている

春の森笑い上手で聞き上手

鳴沙山の砂さらさらと人嫌い

亡夫似のおもざし捜す兵馬俑

無理に謎解いて淋しくなるばかり

軽い飢え抱いて深爪してしまう

黒髪がいのちであったよき時代

浮世とや蛇飲む蛙きっといる

ツーと言えばカーと返ってくるいくさ

情うすい街鋭角に風抜ける

原稿用紙のマ ス目マス目にある

地獄

複製画飾るとぬくい部屋になる

よく笑う人に一目置いておく

不機嫌な街で流行色は黒

愛つむぐ糸太からず細からず

絵手紙で誘うとみんな来てくれる

じぐざぐに歩いて戯画に溶けてゆく

年金手帳ひらくと見える冬景色

通帳にしかと足跡つけてある

寒い日が続く聞く耳持ってから

人間が好きで約束かかえ込む

立話だけで帰った万歩計

青い炎にふれた火傷で癒えにくし

針のない時計を持って夢買いに

星になる言葉を溜めている詩人

魯山人の皿(平成十三年~平成十七年)

軽口をたたくと春が加速する

送り仮名違えたほどの行き違い

フォアボールばかりを投げている冬日

戸惑いを隠すジョークが宙に舞う

大道芸おもしろくなる春の街

天地の気もらって弾む春の靴

雨しとど敵と味方の数を読む

こひびとと書くとしんそこ溺れそう

レトルトの惣菜威張り過ぎないか

ラブゲーム男が勝てるはずがない

自分に吐く嘘が上手になってきた

少年無口山の高さを知ってから

花道がバリアフリーと限らない

許し合うべしと花屋に花がある

アンニュイな鏡と暮れてゆく晩夏

思い出は過剰包装しておこう

左手は右手のおまけではないぞ

絵に描いた餅が美し過ぎないか

二の矢には少し情けを込めておく

綿雲よ亡母の旅はどの辺り

にんげんをやめますおしゃれやめるとき

覚悟召されよXデーはいつかくる

三枚目半がわたしの役どころ

立話するとおばさん度が上がる

善人に囲まれ酸素不足気味

文豪の泊まった宿で気をもらう

輝いている老人手帳母子手帳

夢掴むために両手は空けておく

自分への土産溥傑の軸を買う

長城をいつか月から見てやろう

秋がくる振り向きぐせのとれぬまま

バリアフリーで転んだ傷が治らない

凡人が上手に描く無題の絵

ウォーキング北風小僧道連れに

気にかかるその後のノラは幸せか

温度差があるおおきにとありがとう

経済も人情もいまシュガーレス

さぬきうどんの腰はポリシー持っている

秘めごとにリボンをかけて花飾る

損得がからみ油と水混じる

飲み込んだ言葉いい味出してくる

四万十の河童はきっとみな長寿

昼寝する蝉のゴスペル聴きながら

竹光はとかく本気になりたがる

途中下車丸い答が欲しいから

歳時記を大切にする艶ぶきん

目刺しふと思うコーラスコンクール

風立ちぬ少し歩幅を広くとる

六十路まだデッサンを繰り返す

流れ星地球もいつかこのように

ふくらんだ蕾は明日を過信する

浮雲よ出処進退知ってるか

美しい言葉で傷に塩をふる

うっかりと自分の尻尾踏んで転け

足腰の軋まぬうちにヨーロッパ

時により玉虫色にするけじめ

真実を掘ると地雷に触れるかも

死ぬことより死ぬプロセスが恐ろしい

よく笑う人に神様寄ってくる

ユングフラウヨッホ酸欠楽しまん

風船一つ飛ばすわたしのエピローグ

転んだらそのまま死んだふりをする

人間は神の駄作か傑作か

野心家で一日八時間眠る

ところてん式で一日ずつ暮れる

こだわって傷を大きくするばかり

日の丸にグッドデザイン賞上げる

外反拇趾ガラスの靴はもう履けぬ

秋風に教えてもらう現在地

食べて寝て笑うと棘が抜けていた

カルチャーで教えることは学ぶこと

小春日へ片付けもののあれやこれ

塩胡椒振りたい男増えてきた

飽食の箸では何も掴めない

どっこいしょ言うたび老いをまき散らす

文楽のおんなが纏う哀と愛

マリオネットの糸がもつれて嘘まこと

雲の峰仰いで答乞うている

トロイの栄華語り継ぐのは風ばかり

昔とは我慢が美徳だった頃

大らかに話す過去形未来形

昼寝ふと覚めわたし誰ここは何処

女ですもの女みる目は持っている

カサブランカでボガード見たは白昼夢

雑学がとっても好きな古机

ど忘れのたび砂漠化が進む脳

ねぎらえばまだ言うことを聞く五体

ときたまに自分の芯で頭打つ

キズテープいっぱい貼ってあるこころ

見たくないものを見すぎたドライアイ

風船しぼむ望み叶った形して

魯山人の皿おおらかにいのち盛る

に生を受けたことに因んでつけました。 この句集のタイトルは、ギリシャ時代に生まれた占星術の十二の星座の一つ「天秤座」

天秤座は正義の女神アストライアの持つ天秤の皿が二つあるように、パートナーが重要

てくれているお陰で、今どれほど充実した日々を送ることが出来ているかは、申すまでも な人生上の価値を占めるのだそうです。片方は私が乗り、もう片方にしっかり川柳が乗っ

ありません。

は当時柳歴七年ほどで『川柳塔』の前身である『川柳雑誌』で、麻生路郎、清水白柳先生 に、平凡な見合い結婚で螺子工場の三代目に嫁ぎました。当初から同居をした義母 (一栄) 子どもの頃、本がいっぱい読めるから本屋さんにお嫁に行きたい、などと言っていたの

の指導のもと不朽洞会員(同人)として作句していました。 次々と三人の息子に恵まれましたから、子育てと家事にふり回されながら、川柳三昧の

をしたのも、今は懐かしい思い出です。 とつかず離れずの歳月でした。また、昭和四十六年には句集『ねっくれす』上梓の手伝い 義母に簡単な句の助言を求められたり、句会のお伴をしたりで、この足掛け二十年は川柳

旅立ちました。すると私はそうするのが当然であるように、気がつけば翌月から作句をは 昭和五十四年二月、義母はその戒名に「柳」の一字を入れてもらい、七十七歳で天国へ

じめていたのです。 病弱だった義母を折にふれ訪ねて下さっていた小出智子さんが中心になって、女性ば

りの句会をはじめられたので、すぐ私もその仲間に入れていただきました。以来、家族を

第一にしながら作句を楽しんで今日に至っています。

小出智子さんは、「川柳塔のお母さん」と皆から慕われ、理事長としての活躍を期待さ

けています。すでに十年が過ぎましたが、川柳はおろか人間性についても、とても足元に れながら、平成九年惜しくも七十歳で生涯を閉じられました。「やさしい言葉で奥行きの もおよばぬ不肖の弟子で恥じ入るばかりです。 智子さんからいただいたアドバイスは枚挙にいとまありませんが、すべて心に深く刻みつ ある句を。ライバルを持ちましょう。自分の目標とする選者に挑戦しなさい。」などなど、

だいております。先生のご恩に報いるすべとてありませんが、三回忌を迎えられるにあた 賜りました。先生のご指示により、心血を注いでこられた仕事の一端を現在担わせていた り、せめてこの句集をご霊前にお供えし、改めて私の二十七年をごらんいただきたいと思 また、私にとって神様的存在である橘高薫風先生には、たびたび厳しく温かいご指導を

います。

ございました。 お力尽くし下さった木本朱夏さんはじめ、田中正坊さん、奥田みつ子さん、本当に有難う に光栄であり、厚くお礼申し上げます。また、腰の重い私の背を押し多大の労をいとわず あとになりましたが木津川計先生にはご多忙の中を、身に余る序文を頂戴したことは誠

せん。 すので、その通過点としてこの拙い句集をお読みいただければ、これ以上の幸せはありま 生涯に一句でも「いのちある句」が残せるように、これからも歩み続ける所存でおりま

有難うございました。

平成十九年 (二〇〇七) 四月

出 楓

西

楽

177

## 略歷

昭和13年(1938) 京都市生まれ 昭和54年(1979) 川柳をはじめる

現 在 川柳塔社理事長 (社)全日本川柳協会常任幹事 朝日カルチャーセンター講師 朝日新聞なにわ柳壇選者 山陽新聞山陽柳壇選者



句 碑

岡山県笠岡市古城山公園 平成14年(2002)9月建立

川柳句集 天 秤

座

発行日 平成十九年 (二〇〇七) 四月一日

者

西 出

著

楽

楓

大阪市天王寺区空堀町八—五 〇六一六七六二一四四〇八

話

住

所

₹ 543 0012 電

塔 社

発行所

III

柳

定

価 二〇〇〇円

刷 美研アート

印

